

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380172

研究課題名(和文) 移民・外国人の包摂と排除に対する「国民意識構造の影響」に関する国制史的考察

研究課題名(英文) National Identity and its effects on Migration Policies

研究代表者

梶原 克彦 (Katsuhiko, Kajiwara)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：10378515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：第一に国内にて、資料収集を国立国会図書館などで実施し、また文献の読み込みを行った。第二に海外で資料収集を行った。主にオーストリア国立図書館、国立文書館、ウィーン大学図書館でこれを行い、2015年度の在外研修の際は、英国図書館や国立公文書館等も利用した。第三に成果公表を行った。帝政期、大戦間期について、国民意識の研究を深化させ、移民・外国人政策という観点から、「軍事移民」としての捕虜や敵国民間人の収容政策の研究も行った。第二次大戦後及びEU成立以後の時代にかけては、特に2000年代以降の外国人政策に注目した。第四は比較・共同研究への展開であり、他の科研研究会などを通じて、国際比較の視点を得た。

研究成果の概要(英文)：Firstly I have conducted archival research at the National Diet Library in Tokyo and have read documents I have collected. Secondly, I have collected research materials abroad including Austrian National Library, Austrian State Archive, the Library at University of Vienna, and so on. During my stay in London on sabbatical (from June 2015 to March 2016), I have visited British Library and the National Archives. Thirdly I have published some papers and given presentation at academic conferences. On imperial and interwar periods, I have continued my research on Austrian national identity, and further I have worked on the topic of POWs and civil interned during World War I from the standpoint of "military migration". On current situation, I have focused on Immigrant policy especially since 2000. Fourthly I have obtained the insight into international comparative studies on this topic.

研究分野：政治学

キーワード：ナショナリズム 国民国家 移民 難民 捕虜

## 1. 研究開始当初の背景

現代のヨーロッパ政治では、様々な移民の社会統合モデルが提示される一方で、排外的暴力など移民排斥の動きもある。こうした移民の包摂と排除をめぐる、移民に寛容で国民概念が開放的な国と、移民に厳しく国民概念が閉鎖的な国、という図式が登場することがある。さらにこの現代の移民への対応は、伝統的性格を有するかのように語られている。ではこの紋切り型の国民論と移民に対する姿勢とは歴史上の実態を反映しているだろうか。

確かに国民意識と移民への姿勢との間には相関関係がある。国民意識は「われわれ」と「彼ら」という認識枠組みを形作っており、これに従い移民・外国人の包摂や排除が行われる。しかし国民概念は大きく転換することもあるし、一面的なものではない。さらに移民や外国人への対応も時代によって様々である。例えば、フランスの国民概念も、共和政理念への同意だけでなく血統主義的な理念が強調された時もあり、それに基づき外国人排斥が生じたこともあった。またドイツも2002年に出生地主義による国籍取得を認めるようになり、これは「移民国」という自国認識の登場に支えられていた。それゆえ、現在の移民の包摂と排除をめぐる問題は、文化決定論の図式ではなく、むしろ国民意識の構造に左右される継続と変容の観点から把握されるべきではないか、と考えられた。

## 2. 研究の目的

本研究では、国民意識の構造が移民・外国人の包摂と排除に与える影響を、国家形態の違いに応じた国民意識の変容に注目して考察する。そのために、(1) 19世紀末から現代までのオーストリアの国家の形態に注目し、多民族国家(帝政期)・国民国家(大戦間期から1990年代末まで)・国民国家と超国家組織の併存(現在)に分類する。(2) これら三つの国家形態ごとに国民意識の構造を明らかにする。(3) この国民意識構造と移民・外国人の包摂ないし排除との関連を検討する。この作業から、現代オーストリアの移民問題が示す歴史上の特徴を明らかにし、ひいては外国人と歴史問題という観点から、日本の事例に対する示唆を得ることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の方法上の大きな特色は、(1) 歴史学と政治学の架橋という観点から、一方では資料の徹底的な読み込みからなる実証的な手法を採用しつつ、他方では時間軸を大きくとることで約100年を単位とした、歴史分析としてはマクロな通時分析を行っている点、(2) そうした分析を行う上で、単なる事例の集積にならないように、国家形態と時代別に4つのカテゴリーを設けてそれぞれにおける国民意識構造の特徴を抽出・理論化することを試みている点、である。

## 4. 研究成果

これまでに進めた内容は主として以下の四点である。

### (1) 国内における資料調査・基礎研究

第一に国内において、資料収集を国立国会図書館や外務省外交史料館で実施し、また文献の読み込みによる基礎研究を行った。主として資料収集は第一次大戦期の欧州における邦人の動きについて、基礎研究については移民・外国人の取扱いと国民意識との関係に関して読解をすすめた。これらの成果の一部は、大学での講義や高等学校での出張講義に盛り込み、国民への発信に努めた。

### (2) 海外での資料調査・研究打合せ

第二に海外での資料収集・研究打ち合わせを行った。主として、オーストリア国立図書館、国立文書館、ウィーン大学図書館でこれを行い、2015年度には在外研修(ロンドン)の機会を得たので、英国図書館(British Library)、ロンドン大学図書館(Senate Hall)、スラヴ研究所(SSEES)図書館(ユニバーシティ・カレッジ)、ロンドン経済政治学院(LSE)図書館、国立公文書館(National Archives)等も利用した。時期は春の休講時期を利用し、国民意識の状況把握と、その当時における移民・外国人政策の在り方に注意しつつ、資料の収集に努めた。

### (3) 成果公表

第三に上記の調査に基づき、成果公表を行った。大戦間期について、従来行ってきた国民意識の研究を深化させ、オーストリア人意識の在り方を捉えると共に、帝国崩壊以後ドイツ系住民の国という認識が深まっていったが、その諸相を把握することに努めた。雑誌論文ととりあげたハインリッヒ・マタヤとギド・ツェルナットはこれまで国民意識研究で取り上げられることはなかったが、前者は1930年代に、後者は1930年代から国民論を披瀝し、とくに亡命後、中欧問題との関連からこれを展開した。

帝政期については、まずオーストリア国民意識に大きな影響を与えた総ドイツ主義の源流を探ることを試みた。雑誌論文とではオンノー・クロップの国家像を考察した。クロップもその重要性に反してこれまで顧みられることが少なかった人物であり、ベルベデーレ・サークルと帝国改編論、プロイセンとの対抗とオーストリア意識、さらにはヤーコプ・ブルクハルトやヴェルナー・ケーギら小国論の系譜との関係、など今後の検討課題も提示した。

さらにドイツ民族観を考えるうえで極めて重要な第一次世界大戦期について、移民・外国人政策の実施という観点から、「軍事移民」としての捕虜、敵国外国人民間人、国内の非ドイツ系避難民などに関する収容政策

の研究を行った。これにより、総力戦の中で民族意識が先鋭化していき、非ドイツ系に対する処遇が厳しくなっていた点が確認されつつも、一方で多民族国家のアイデンティティが存在し、例えば民族別の処遇に対して反発する様子も伺えた。ここに国民意識の在り方と「移民・外国人」の包摂・排除とのかかわりの一端を確認できた。書評論文ではとくにオーストリアにおける捕虜政策の展開に関する部分を担当し、とりわけ民族政策的、人種的な観点から行われた収容政策に関する指摘を行った。また雑誌論文では、捕虜政策に見受けられる国民意識構造と「外国人政策」との関係、総力戦における外国人労働力の位置づけという観点から論じた。

第二次大戦後および EU 成立以後の時代にかけては、とくに 2000 年代に入ってから外国人政策の実施に注目し、2005 年に同化政策を施行したヴォルフガング・シュツェル内閣を考察した。雑誌論文は、その成果の一部を、国政の一翼を担ってきた保守政党である国民党 (ÖVP) の変容に関する論文として公表したものである。

上記の雑誌論文の公表以外に、学会発表を 3 件おこなった。学会発表は、上記雑誌論文のもととなったものであり、移民・外国人政策の厳格化路線を採ることになったシュツェル内閣期の国民党の党勢に関して考察した。この報告は、2000 年代のナショナル・アイデンティティと移民・外国人政策との関連についての研究成果の一部をなしている。学会発表は、大津留厚著『捕虜が働くとき』の合評会に際し、捕虜の労働に注目して展開された同書に関して、多民族国家時代の「外国人労働者」政策の在り方や、第二次大戦期の過酷な捕虜労役との比較を念頭に置き、第一次大戦期の捕虜労働の位置づけを指摘したものである。学会発表は、総力戦のなかで自他の区分がはっきりしていくなか、国民意識構造が他者である捕虜や敵国民間人に対してどのような政策となって現れるのか、という問題意識から行われたものである。オーストリアを中心とした欧州各国の事例だけでなく、世界的な人の移動という観点から、日本にもその視野を広げ、国際比較を試みた。

#### (4) 比較・共同研究への展開

第四は比較・共同研究への展開である。2014 年より「保守政党の国際比較」科研に変わり、同科研研究会で福祉国家、移民・外国人政策、右翼ポピュリズム政党との関連について、1970 年代から現代にかけての欧米ならびにアジアと比較検討を重ねる機会を得た。また 2015 年より「第一次世界大戦期の世界的な「人の移動」」科研に加わった。同研究会では、第一次大戦期に発生した「移民・外国人」問題として捕虜や民間人抑留、移民労働者の取り扱いを議論し、これを通じて移民・外国人の包摂と排除に関して、20 世紀初

頭から戴戦間期への移行期の様子を知る手がかりを得た。

#### (5) その他

国民意識構造と移民・外国人の包摂と排除に関して、わけても帝政期から大戦間期にかけてはその一端が確認されつつある。しかしながら、このホスト社会側の認識が移民・外国人の包摂と排除を主として規定しているという見方は、2015 年夏以降の欧州における難民危機以降、とりわけ移民・難民の流入の増大とこれに対する忌避感・排斥運動の増加という現実には大きな修正を余儀なくされているかに思われる。したがって、本研究で打ち出した仮説・テーゼをより実証的に検討し、現在の移民・難民危機に対して一定の回答を用意することが今後の大きな課題であると思われた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

梶原克彦「シュツェル内閣期の ÖVP オーストリアにおける保守政党の「復権」をめぐる一考察」『愛媛大学法文学部論集 社会科学編』第 42 号、2017 年、23 - 40 ページ、査読無。

梶原克彦「O・クロップと総ドイツ主義 オーストリア国民論の系譜学 四」『愛媛法学会雑誌』第 42 巻第 1 号、2015 年 215 - 226 ページ。査読無。

梶原克彦〔翻訳〕「ハンス・シュミット『小ドイツ主義歴史観の創設者たち』」『愛媛法学会雑誌』第 42 巻第 1 号、2015 年、227 - 243 ページ。

梶原克彦「G・ツェルナットの中欧論 オーストリア国民論の系譜学 三」『愛媛大学法文学部論集』第 38 号、13 - 39 ページ、2015 年。査読無。

梶原克彦「H・マタヤのドナウ・ヨーロッパ論 オーストリア国民論の系譜学 二」『愛媛法学会雑誌』第 41 巻第 1・2 号 1 - 29 ページ、2015 年。査読無。

梶原克彦「国民共同体の境界 第一次世界大戦の経験・総力戦のなかの捕虜」『愛媛大学法文学部論集』第 37 号、53 - 76 ページ、2014 年。査読無。

梶原克彦〔書評論文〕(奈良岡聰智と共著)「大津留厚著『捕虜が働くとき 第一次世界大戦・総力戦の狭間で』(人文書院、2013 年)」『西洋史学』254 号、2014 年、88-91 ページ。

〔学会発表〕(計3件)

梶原克彦「第一次世界大戦と捕虜 独塊および日本における捕虜取り扱いを中心に」愛媛大学法文学部・岩手大学人文社会科学部 学術交流公開講演会、2017年3月18日、愛媛大学(愛媛県・松山市)。

梶原克彦「オーストリアの保守政党 復権か凋落か」日本比較政治学会、2016年6月25日、京都産業大学壬生校地(京都府・京都市)。

梶原克彦「書評：大津留 厚『捕虜が働くとき 第一次世界大戦・総力戦の狭間で』(人文書院、2013年)京大人文研 連続合評会「第一次世界大戦を考える」2014年5月10日、京都大学人文科学研究所(京都府・京都市)。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

梶原 克彦 (KAJIWARA, Katsuhiko)  
愛媛大学・法文学部・准教授  
研究者番号：10378515

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

なし